

# 朝鮮半島の歴史と民族の意識

神奈川銀杏会、三土会、  
平成30年4月21日 村田 禪

# 前書き

- 私の記憶によれば、韓国の歴代の大統領は多くの人が、任期を終える時期になると、本人、又は親戚縁者、友人らが、贈収賄などの罪に問われている。従軍慰安婦の問題でも、政府間の解決後も何度も何度も蒸し返される。その都度、新しい理由づけがなされる。彼らは一方的に「日本人は歴史を直視してない」と、非難する。しかし世界史の流れからすると、必ずしもそうとは言い切れない。
- 何故だろう。何か彼ら民族の深層心理に「深く乗り越えにくいわだかまりというか、それを内包する民族的文化」があるのではないか。長い歴史の中で、圧政と外国の支配から来た民族的意識の歪みのようなものが、根強よくあるのではないか。
- これらについて考えてみよう、というのが問題の発端である。

# 恨(ハン)の文化

- 朝鮮文化における思考様式の一つで感情的なしこり、痛恨、悲哀、無常観を指す朝鮮語の概念。朝鮮における文化、思想の全ての根幹となっている。恨の文化は、代々の王権や両班(上級官僚)による苛斂誅求を極めた階級的支配に対する民衆の抵抗意識と、漢代の昔より幾度となく半島を襲った中国からの異民族(漢族、モンゴル族、女真族など)による侵略、征服で永続的な服従を余儀なくされた国辱を引きずり、内外の圧倒的な力に依存せざるを得なかった朝鮮半島独特の文化。
- 恨の形成の裏には、儒教の教えや習慣が本来の形を変えてエスカレートさせていったことが背景にあったといわれ、それは上位者の下位者に対する苛烈な扱いを正当化する解釈や、下位の者は過酷な扱いを正当化する立場を受容しなければならぬとする解釈となった。
- 朝鮮民族の恨の概念の本質。一言でいうと、自分がうまくいかないことを、他人のせいにする。(韓昌祐、在日韓国人1世)

# 恨の文化(つづき・1)

朝鮮文化における恨(はん)は、伝統規範からみて、責任を他者に押し付けられない状況の下で、階層型秩序で下位におかれた者の不満の累積とその解消願望(筑波大教授、歴史学者古田博司)。朝鮮民族の恨は、単なる恨みや辛みだけでなく、無念さ悲哀や無常観、(虐げる側である優越者に対する)憧れや妬み、悲惨な境遇からの解放願望など、さまざま感情を表すものであり、この文化は恨の文化と呼ばれる。

# 恨の文化(つづき・2)

植民地時代(1910-45)の抑圧の中で、朝鮮民衆の中に蓄積されてきた痛恨、悲哀、怒りの混じった感情。文明的にも文化的にも、より優れた国である朝鮮国が、いわば野蛮な状態であった日本国に、稲作文明、宗教・彫刻・陶磁器・文字・法令・音楽等々、あらゆる文明を伝授してきたにも拘わらず、ちょっと西洋文明をかじっただけで、増長して征韓論などつけしからん事を言い出し、先輩に刃向って武力で征服し、野蛮な行為をやりたい放題にやって威張ってきた野蛮人たる日本人に対して、朝鮮国に気の緩みがあったことに対し痛恨、悲哀の念を抱くと同時に、それ故にこそ、怒りは遺伝子のレベルまで、朝鮮民族に刻み込まれており、反日感情など全く受けてない若人であっても、ちょっとしたきっかけさえあれば、遺伝子のハンの念に呼応して怒りとなって爆発する。

# 恨の文化(つづき・3)

たった一つだけ、次のような意見もあった。中国人の陳莉氏の提言ともいえることで、韓国中央日報(2014/3/19)(sunday366号)が報道している。韓国の恨には2種類ある。一つには今まで述べた「恨」であり、もう一つは「自分の願い」は「かくあるべき姿」としての向上心に近い概念(興)がある。実態としての「恨」と「かくあるべき姿」の「恨」を状況によって使い分けると同時に、「今に見ている俺だって」という自意識が心の支えであって、目標に向かって全力投球する原動力である。それは、「恨」と「興」の融合である。

# 恨の文化(つづき・4)

金慶珠氏は、「恨の国・韓国」の著書の中で、広辞苑によると、恨とは「韓国民衆の被抑圧の歴史が培った苦難・孤立・絶望の集合的感情。課せられた不当な仕打ち、不正義への奥深い怒りの感情」とあるが、恨の一部である「怨恨」のみの解釈である。韓国人の恨は、「懲罰的復讐」を目指すものではなく、その方向性は、統合的幸せを願う心でもある、とも述べている。これまでの「恨の文化」の解釈の追加的補正を試みている。

# 両班とは

- 高麗時代の文武の官僚(科擧によって選ばれた)を文班(東班)と武班(西班)に分けたことに始まり(958)、次の朝鮮時代(李氏朝鮮,1392—1910)では彼らは政治的・社会的特権身分階層として文武官僚の出身母体となった。更に大土地所有者として官職を独占した。
- 彼らが、10世紀以上にもわたり朝鮮社会を支配し、民族の社会を腐敗墮落させ、民族の意識の深層心理に深く影響をあたえた。「恨の文化」を形成させる元となった。



# 冊封(さくほう)関係

- 中国歴代王朝が周辺アジア諸国との外交関係を維持する為に用いた対外政策。中国の皇帝が朝貢してきた周辺諸国の君主に対し官号・爵位などを与えて君臣関係を結んで、彼らにその統治を認める。(冊封)宗主国対従属国の関係をとる。
- 一方朝鮮国は、自らを小中華とし、周辺の他民族を北荻(清)、東夷(日本)とみなしていた。内心では、自らの優れた文化文明を輸出している劣国とみなしていた。

# 朝鮮半島の歴史

- 地政学的特徴として、鴨緑江、豆満江という大川による境界はあるものの、大陸とは地続きであり、古来何百回となく、大陸からの侵略を受けた。また、中国の支配層が変わる度に冊法の関係を新にせねばならなかった。朝貢をして、穏やかな関係にあったのは少なく、殆どは、戦いに敗れ従(隷)属関係におかれた。
- 四辺海に囲まれた日本とは、地政学的に大きな違いがある。

- 朝鮮建国の父とされる檀君は神話の世界の人で、歴史上の朝鮮のスタートは「衛氏朝鮮」と呼ばれる政権である。朝鮮は中国と陸続きだったせいか日本よりはるかに早く中国の歴史書(魏志)に登場する。中国からの亡命者によって建国されたという(紀元前194年、燕人の衛満)。歴史に初めて登場する政権が、他国からの亡命者によるという事実は、韓国人にとっては辛い現実である。その後「衛氏朝鮮」は漢帝国と良好な関係を維持していたが紀元前108年に、内紛を起こし滅亡した。その後、漢帝国の支配を受けた。それも、313年に高句麗の攻撃を受け撤退した。初めて設置された国家が亡命中国人によるものであり、その国家が倒れて後も4世紀にわたり占領が続いたのである。これでも韓国受難の歴史は始まったばかりだが、彼らの一度抱いた恨みは決して忘れない「恨」の精神はこうしたなかで育まれたものである。(豊田隆雄)

- 「衛氏朝鮮」が滅亡した頃、漢による直轄領以外にも新国家建設の動きがあった。北方では強国・高句麗が、南方の漢江から南では馬韓、辰韓、弁韓が形成された。やがて、馬韓が百済に、辰韓が新羅となり、日本の古代史と関わりあった。これらの間にも戦いがあったり、676年に新羅が3国を統一した。

# 王建が朝鮮半島統一王朝・高麗建国 (936)

936年に王建が半島を統一し、高麗を建国した。一方大陸では、唐の滅亡後「宋」により統一され、高麗は冊法関係に入った。宋の制度を採り入れ中央官庁の機能を政治・軍事・財政に三分するシステムや科挙制度を取り入れた(958)。科挙に登用された文官を両班と呼び武官は戦争の功績によるのみで、常に文官の下におかれた。高麗の社会構造は、王族、両班(上級管吏)、中人、常民、賤民に分かれていた。実質的には両班が社会の頂点に立っていたのだが、この身分は世襲できたため時代とともに数が増えていく。次代の李氏朝鮮(1392-1910)末期には、国民の50%以上が両班であった。両班は特権階級として、兵役と労役が免除され、更に納税が免除されていた。これらが、朝鮮半島の社会と歴史を墮落させていった(豊田隆雄)。

- その後、高麗は、3世紀半にわたり、北方民族、北宋、契丹(遼)、女真、金、モンゴル民族の侵略を受け、それらと戦い、いずれにも敗れて服属。中国に倣って、異民族(北狄)を見下す意識があり、戦いを挑んでいくのだが、いずれにも敗れて降伏した。その後、元に従い、日本を侵攻、文永の役(1274)、弘安の役(1281)を起こした。
- その後日本の海賊集団「倭寇」の侵略に悩まされ、やがては高麗王朝滅亡の遠因となった。

# 新王朝・李氏朝鮮の建国(1392-1910)

- 李成桂が、1392年高麗最後の王・恭讓王から王位を奪取して、即位した。即位しても、明の皇帝・洪武帝が承認してくれないと自称・皇帝という身分のままである(冊法)。3代目の明皇帝・永楽帝の代になって、1403年に李氏朝鮮王朝が明に認知された。
- 李成桂が目指したのは儒教立国であり、「崇儒廃佛」、すなわち仏教の弾圧を始めた。全国の寺や仏像は破壊、僧侶は賤民の身分に落とされた。

李氏朝鮮は、建国後2世紀は平和な時代であったが、1587年豊臣秀吉の「征明」構想に悩まされることになる。その後文禄(1592)・慶長(1597)の役を通して国土にとつともない疲弊消耗を蒙ることになる。朝鮮ではこの侵攻を「壬辰倭乱」として記憶し、日本に対し恨みを抱くようになる。そして李氏朝鮮には、次なる脅威である女真族(後金、後の清)の再来襲に対抗するだけの力は残っていなかった。1619年サルフの戦いで、明朝連合軍は後金に完膚なきまでに敗れ降伏、朝鮮は後金を兄、朝鮮を弟とする兄弟の盟約に同意させられ(丁卯胡乱)、毎年上納金を貢ぐことで講和した。これは、小中華を自称すら朝鮮には耐えがたく、後に清に宣戦布告。1636年清の太宗は13万の兵を率いて侵入し屈服させた(丙子胡乱)。降伏した李氏朝鮮の仁祖は軽蔑していた胡服(満州服)を着せられ、清の太宗に三回ひざまずき九回地面に頭をつける(九叩三拝・三跪叩頭)という屈辱的な降伏をした。完全な清の属国となった。満州族の清は中国を統一し、決まった貢物を出していればその後約2世紀の間平和な生活が保障された。



- 19世紀に入ると清は、アヘン戦争(1840)に敗れ、南京条約(1842)で開国した。一方朝鮮は日本の明治維新(1868)による政権の変革の通知を、文書に使われていた文字を理由に8年間受け取りを拒否し続けた(日本では征韓論)。その後日本との間に日朝修好条規(1876)を結び、釜山、仁川、元山の開港、治外法権の承認、関税の免除などを取り決めた。その後米英露仏独らと同様な開国通商条約を結んだ。
- その後、1894年に東学党の乱(甲午農民戦争)を契機に日清戦争が勃発、日本は1895年の下関条約で、清に朝鮮の独立を認めさせ、遼東半島(三国干渉で返却)、台湾の割譲、賠償金二億両(テール)を支払う事等を約束させた。
- 日清戦争後、国内の改革派は日本の明治維新を手本に清への臣従廃止、教育の近代化、身分制の廃止等の近代化を進めてきた(甲午改革、1894-96)。日本が三国干渉に屈服するのを見るや保守派が閔妃一族と共に勢力を盛り返し、改革は後退した。その後閔妃殺害事件(乙未事変、1895)で恐れをなした高宗はロシア公使館に居を移し(露館はん遷、1896)、朝鮮は一時ロシアの支配下に置かれた。

- この時期、イギリスの学者イザベラ・バードが「朝鮮紀行」の中でその頃の朝鮮王朝のどうしようもない腐敗が随所に記録されており、李朝朝鮮の支配層を免許皆伝の吸血鬼と述べている。
- その後ロシアは義和団事件(1900-01)で満州を事実上手に入れ、露骨な南下政策を進め朝鮮に軍港を開設しようとしたが、日本の反対で一時断念。ロシアとの戦争を予期した日本政府は、1904年2月に「日韓議定書」を結び、韓国政府に対する施政忠告権、韓国王室の安全保障、独立の保証と防衛等を取り決め韓国内で合法的に軍事行動が取れるようにした。
- 1905年日露戦争後のポーツマス条約の第二条でロシアは日本による朝鮮の支配権を容認する事となった。「第二次日韓協約」を結び統監府をおき、伊藤博文を初代統監に任命した。1909年に暗殺。
- 1910年に日本は「韓国併合条約」を結び韓国を併合した。

- 2次大戦後(1945)、韓国は連合国に加えられず戦勝国と見なされなかった。米国の信託統治下に置かれ、独立能力なしと見なされ、1948年になってようやく独立した。1951年9月のサンフランシスコ講和会議にオブザーバーとしての参加も拒否された。
- まとめ:(1)地政学的理由とはいえ、これだけ頻繁に国土を荒らされ外国に屈服させられた国民が矜持を持つことは不可能(2)王政の墮落不敗のみならず両班による悪政(3)中国による冊封と自らを小中華と信じ北荻、東夷(日本)を劣国とみなす妄信(4)それらから生まれた恨の文化(5)国の真実の歴史を国民にどう教えるか(捏造史観、自立性史観)

# 参考文献

1. 東洋倫理の敗北、真実の朝鮮近現代史  
西洋人の見た「究極の腐敗に喘ぐ民衆」の世界、浅井壮一郎著(朱鳥社)
2. 韓国人の歴史観、黒田勝弘著(文春新書)
3. 本当は怖ろしい韓国の歴史、豊田隆雄著(彩図社)
4. 恨の国・韓国、金 慶珠(キム キョンジュ)著(祥伝社)
5. 韓国現代史(大統領たちの栄光と蹉跌)、木村幹著(中公新書)
6. 大韓民国の物語(韓国の「国史」教科書を書き換えよ)、李 榮薫(イ ヨンフン)著、永島広紀訳(文芸春秋)
7. 日韓がタブーにする半島の歴史、室谷克実著(新潮新書)
8. 日本の現代史、横内則之著(文芸社)

# 退任後に検察の捜査を受けた大統領

- 1987年の民主化以来、任期を終えた大統領の検察の捜査が続く。95年に盧泰愚(ノテウ)(懲役17年)全斗煥(チョンドウファン)(無期懲役)(後に両名とも特別赦免で釈放)、2009年に盧武鉉(ノムヒョン)(自殺のため捜査中断)、昨年には朴槿恵(パククネ)(懲役30年を求刑)が取り調べを受けた。退任後に罪に問われなかったのは金泳三(キムヨンサム)と金大中(キムデジュン)だけだが、それぞれ息子が不正に関与し有罪判決。今回は李明博(イミョンパク)前大統領が収賄で逮捕、取り調べ中。
- これ等も、あとに続く政権が、前の政権の贈収賄を、検察に情報提供(恨の文化)と言われている。

朝鮮		王な出来事	中国	日本
後世	1世紀	前3世紀 箕子朝鮮建国(古朝鮮) 前195 衛満、衛氏朝鮮建国(~前108) 前108 漢の武帝、衛氏朝鮮を滅ぼし、楽浪郡など4郡設置	魏・韓	時漢代末
	2世紀	前1世紀 朱蒙、高句麗建国(~668) 後204 後漢の公孫康、遼東に帯方郡設置(~313)		
三国	[高句麗・新羅・百濟]の争い	3世紀 朝鮮南部に三韓(馬韓・辰韓・弁韓)成立	魏・晋・南北朝	時大和
		313 高句麗、楽浪郡を併合、帯方郡、韓族、濊族により滅亡		
		346 馬韓の地に、百濟成立(~680)		
		358 辰韓の地に新羅成立(~935) このころ弁韓の地に加羅(任那)成立		
		372 高句麗に仏教伝わる		
		384 百濟に仏教伝わる		
		391 高句麗広開土王(好太王)即位(~412) このころ日本、朝鮮諸国の構想に介入		
		538 百濟、日本も仏教を伝える		
		562 新羅、加羅を滅ぼす		
		660 新羅・唐、百濟を滅ぼす		
		663 白村江の戦い、百濟を援助する日本軍敗れる		
		668 新羅・唐、高句麗を滅ぼす		
前期	唐	676 新羅、唐を駆逐して朝鮮半島を統一(都:慶州)	唐	時唐代末
		698 靺鞨人大祚榮、震国建国		
		713 震国、渤海と改称		
後世	唐	751 慶州に仏国寺を建立		

高麗	高麗(高麗)	926	渤海、契丹により滅亡	高麗	高麗				
		935	高麗、新羅を滅ぼし、半島統一						
		958	科挙制採用						
		963	高麗、北宋に服属						
		994	高麗、契丹に服属						
		1126	高麗、金に服属						
		1258	高麗、モンゴルに服属						
		1274	高麗、元に従い日本攻撃(文永の役)						
		1281	高麗、再び元と日本攻撃(弘安の役)						
李氏朝鮮	李氏朝鮮	1392	李成桂、李氏朝鮮建国(~1910)	李氏朝鮮	李氏朝鮮				
		1446	世宗、ハングル(訓民正音)公布						
		1575	東人と西人の両班間の対立激化						
		1592	壬辰の倭乱(文禄の役)(~93)						
		1597	丁酉の倭乱(慶長の役)(~98)						
		1636	李氏朝鮮、清に服属						
		1643	天主教(キリスト教)伝わる						
		1791	天主教を禁じ書籍を焼く(辛亥の邪獄)						
		1801	天主教徒弾圧(辛酉の邪獄)						
		1811	洪景来らの指揮する平安道農民戦争(~1812)						
		1860	崔濟愚、東学をおこす						
		1875	江華島事件						
		1876	日朝修好条規(江華条約)						
		1882	壬午事変(事大党と独立党の抗争)						
		1884	甲申政変(親日開化派のクーデタ)						
		1894	甲午農民戦争(東学党の乱)→日清戦争(~95)						
		1897	国号を大韓と改める						
		1910	韓国併合 李氏朝鮮滅亡						
		大韓民国	大韓民国			1919	三・一独立運動	大韓民国	大韓民国
						1948	朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国成立		